

“真剣勝負” ～全日本柔道選手権大会～

十勝医師会
耳鼻咽喉科おとふけクリニック

中川 雅文

毎年4月29日の昭和の日に日本武道館で行われる全日本柔道選手権大会の観戦を続けてもう10年以上になる。完全に年に1度の恒例行事になってしまった。前の日の仕事が終わり次第、帯広空港より羽田に飛び、日本武道館のある東京九段下の近くのホテルに宿泊して、翌朝日本武道館へ向かう。歩いて10分程度で日本武道館に到着できるが、早めに行くと有力選手やかつての全日本柔道選手権大会で活躍した選手によく出くわす。その後パンフレットを購入し、試合を見て帰るわけである。

思えば、柔道との付き合いもすっかり長くなってしまった。小学校の頃よりプロレス中継に夢中になり、いろいろな格闘技を観ているうちに最も「真剣勝負」に見えたのが柔道であった。当時私が中学生から高校生の頃で、山下泰裕選手が連覇を重ねていたところだった。大男を大外刈りや内股で投げる姿を見て、「受験勉強が終わって大学に入ったらこれをやろう！そして、重量級の選手になろう！」と決意を固め、大学の柔道部へ入部した。実際柔道をやってみると、思いの外奥の深い競技で、勝つまでは難しいと実感せざるを得なかった。力だけでなく技の研究も要すると実感した。それに重量級になりたいが、いくら身体を鍛えて食事を増やしても体重が増えないのだ。大学時代はいろいろな面で柔道競技を理解する良い経験になった。

働くようになり、40代半ばより健診で高脂血症と中性脂肪の高値を指摘され、内服治療と運動療法を勧められ、どうせやるなら柔道を選び、町の道場へ通い、小学生相手に週2回1時間半柔道をやることにした。準備運動からやるとけっこう良い運動になる。血液検査はほぼ正常化するものの、体重が減ったと思ったらすぐ戻ってしまう。体重面は学生時代とは異なる。継続的に運動はやらないとダメであると身をもって感じた。

さて、全日本柔道選手権大会は、今となっては珍しい体重無差別（体重関係なし）の日本伝統の大会である。オリンピックで金メダルを獲得した古賀稔彦選手（71kg級）や吉田秀彦選手（78kg級）が決勝に出たこともあるが、やはり格闘技は重量級の選手が有利であるという事実には揺るぎはない。全日本柔道選手権を見に行くようになり、1回戦から目の前で試合を観ていると、全国の予選を勝ち抜いてきた強豪が集まっている試合であるが、あっという間に決着がつく試合や、お互いガチガチに組み合っ

てを出せないという試合もある。どちらが投げたか分からない微妙な判定にはすぐに試合会場の大型スクリーンにリプレイが映し出され、観客全員が納得できる仕組みになっている。膠着状態を避けるため、今では技を出す姿勢を見せないと、すぐに審判から「注意」が来てしまうので、選手は技をかけざるをえなくなっている。両者ともに技が出ない場合、「両者反則負け」という珍事もありうる。さらには、「礼に始まり礼に終わる」という柔道精神を大切にするための礼儀作法がなっていない場合も「反則負け」になってしまう。観客席から見ていると礼儀正しい選手は見ていて気持ちよく爽やかになる。自然と応援してしまう。

最近自分の目の前で見た試合でベストの試合といえる試合が、平成30年の決勝の対戦である。ともに重量級で、2回目の優勝を目指す原沢久喜選手と3連覇を目指す王子谷剛志選手の対決となった決勝戦である。全日本柔道選手権大会は1日で日本一を決める大会である。決勝までの原沢選手は延長戦が重なり、疲労が懸念されていた。一方の王子谷選手は決勝までの試合は短時間で試合を終わらせており、スタミナをかなり温存していると思われた。この日の流れからすると、王子谷選手が有利と思われた。案の定、試合開始より、王子谷選手が猛攻撃をかけ原沢選手に迫るが、原沢選手も猛攻に耐えながら技を繰り出すという展開になった。お互いあと一步で勝てそうな技を連発し、やや王子谷選手優勢のまま延長戦へ入る。延長戦に入っても一進一退の攻防になり、延長3分過ぎ、前半飛ばしすぎた王子谷選手のスタミナが逆に尽きてしまい、ばて気味になり、技が出なくなったところを審判より指導が入り、原沢選手の勝利となった。お互い真っ向勝負を挑み、どちらが勝ってもおかしくないような好試合であった。試合後、王子谷選手が精根尽き果て、暈の外で座り込んで立てなくなっていたので、見ている方が心配になるほどの激闘であった。来年の全日本選手権大会はオリンピック選考会になるはずで、また激戦が期待できそうで早くも楽しみである。

また、自分の健康のためにも、できるだけ柔道を続けていきたいと思っている今日この頃である。